

長野県松本市

TAKAMIYA

高宮遺跡Ⅳ

—— 緊急発掘調査報告書 ——



2004.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成15年10月3日～10月17日に実施された長野県松本市高宮北3-11他に所在する高宮遺跡第4次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は鈴与商事株式会社によるガソリンスタンド建設事業に伴う緊急発掘調査であり、同社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書執筆はⅠ：事務局、Ⅱ-1：山本紀之、Ⅱ-3：和田和哉、土器観察表：菊池直哉、その他を直井雅尚が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄：百瀬二三子 遺物復原：五十嵐周子、内澤紀代子 遺構図整理：菊池直哉
遺物実測：菊池直哉、直井雅尚 トレース：菊池直哉 写真撮影：菊池直哉
編 纂：直井雅尚
- 5 本書で使用した遺構名称、番号及び略称は、以下のとおり過去に行われた第1～3次調査の続き番号を使用している。
土器集中区→土集：土集20～22
- 6 図中で用いた方位記号は全て真北方向を用いている。
- 7 遺構・遺物の記述で用いた時期区分や遺構・遺物の分類、用語などの多くは下記文献に拠っている。
松本市教育委員会1994『松本市文化財調査報告No.116松本市高宮遺跡－緊急発掘調査報告書－』
- 8 本調査で得られた出土遺物及び測量図類等の記録は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL0263-86-4710 FAX0263-86-9189)に収蔵されている。

目 次

例言・目次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	3
2 調査体制	3
II 遺跡の位置と歴史的環境	
1 遺跡の位置と地形	5
2 高宮遺跡の過去の調査	5
3 周辺遺跡	5
III 調査	
1 調査の概要	9
2 調査結果	9
(1) 調査区	9
(2) 出土遺物	10
VI 調査のまとめ	13
写真図版	14
抄録	

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

高宮遺跡は松本市街地の南西、高宮地区に位置する周知の埋蔵文化財包蔵地である。平成5年度に第1次発掘調査が行われてから3次にわたって発掘調査が実施されており、古墳時代中期を中心とした集落址と祭祀跡が確認されている。そうしたなか、第1次調査地点に近接した地点でガソリンスタンド建設事業が計画され、埋蔵文化財が破壊される恐れが生じた。このため事業者である鈴与商事株式会社と松本市教育委員会が埋蔵文化財の保護について協議を行ったところ、試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することとし、その結果を踏まえ再度協議を行うことになった。

試掘調査は平成15年9月16・17日に松本市教育委員会が実施し、古墳時代中期を中心とした遺物及び遺物包含層を確認した。この結果を踏まえ、再度遺跡の保護協議を行い、当該開発事業により埋蔵文化財が破壊される地下浸透施設の埋設範囲について発掘調査を行って遺跡の記録保存を図ることとなった。発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、事業者である鈴与商事株式会社と松本市の間に平成15年10月3日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された（委託者：松本市深志1丁目5番15号 鈴与商事株式会社松本支店 支店長 手塚康裕 受託者：松本市丸の内3番7号 松本市長 有賀正）。さらに、平成16年3月24日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部を変更する契約が行われた。

現場での発掘調査は平成15年10月3日から10月17日にかけて行われた。実働は11日間、調査面積は計47.386㎡である。現場での発掘調査終了後、平成15年10月24日付けで長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出、また、同日に松本警察署に埋蔵物発見届を行い、平成15年11月25日付けで長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定を受けた。

出土遺物及び現場測量図類等の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において調査担当者が行った。

2 調査体制

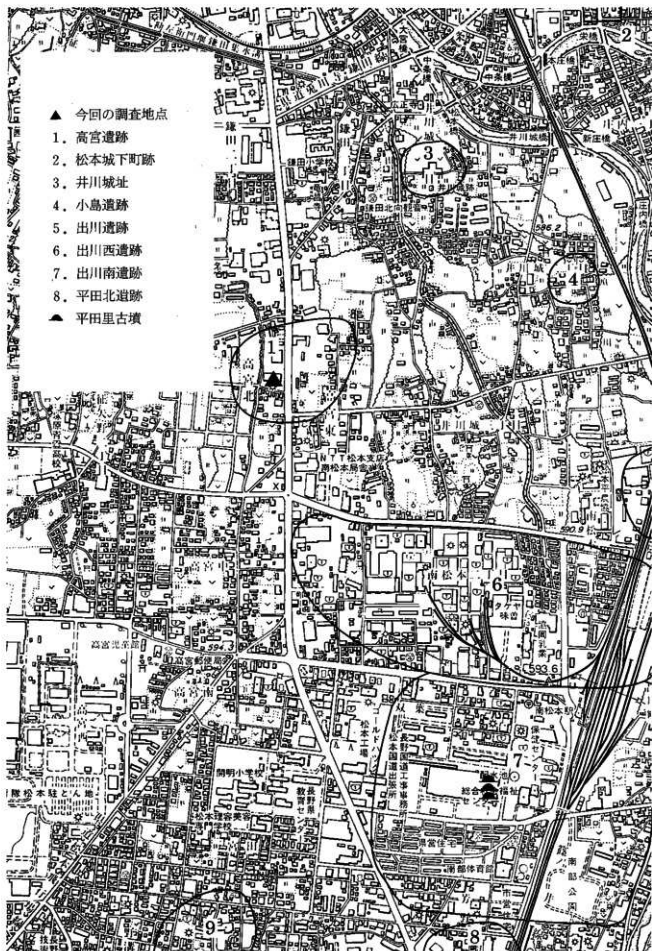
(1) 調査団

- 調査団長** 竹淵公章（松本市教育長）
調査担当 直井雅尚 栗田幸信 菊池直哉（文化課文化財担当）
調査員 今村 克
協力者 荒木 稔 石井脩二 中山自子 横山 清

(2) 事務局

松本市教育委員会文化課

- 有賀一誠（課長）、熊谷康治（課長補佐）、田口博敏（同）、直井雅尚（主査）、久保田剛（主任）、櫻井 了（主事）、渡邊陽子（嘱託）、太田万喜子（同）



第1図 調査区の位地と周辺遺跡 (1/10000)

II 遺跡の位置と歴史的環境

1 遺跡の位置と地形

高宮遺跡は松本市街地南西の高宮地区に所在する。平成5年から計3回(3,387㎡)の発掘調査が実施され、古墳時代中期の集落址と祭祀跡という特異な遺跡であることが判明している。

この付近一帯は、第2次世界大戦前後までは湧水に恵まれた水利の良い稲作地帯となっていたのであるが、国道19号線の開通に伴いやかに都市化開発が進んだため、現在では自然地形の展望は困難なものとなっている。地形上は松本市域に流入する諸河川の複合による沖積扇状地性堆積や三角州性堆積の西南端にあたり、主として奈良井川の影響を受けている。西の奈良井川現河床と遺跡との距離は約1500m、東の田川現河床との距離は約950mを測る。地形面は北北東へきわめて緩く傾斜(5/1000)しており、堆積地形は扇端部分にあたっている。現在は埋め立てられて見られなくなってしまったが、地下水位が高いため、かつては多くの湧水口がいたるところに口を開けていた。これらの湧水は主に夏季だけ顕著に見られ、他の季節には湧水が止まり乾田化することから、夏季だけの湿田状態となり、腐食により植物は遺体として残りにくい状況となっていた。今回の調査区内においても第1～3次調査区内と同様に近代以降の暗渠排水施設とみられる溝状のものが検出されている。大量に湧き出る湧水の水源は上流からの浅層の伏流水とみられるが、現在では上流域での水田の減少や深井戸の普及で減水しているため、灌漑は深井戸揚水が利用されている。

2 高宮遺跡の過去の調査(第2図)

第1次調査 平成5年に松本市教育委員会が土地区画整理に先立って実施した緊急発掘調査。調査地は今回の西側に位置する。調査面積1032㎡。古墳時代中期の竪穴住居址3軒と土坑、同時期の遺物を集積した祭祀跡とみられる土器集中区15か所を検出し、多くの遺物が出土した。土器集中区は湧水による流路帯の縁に添って検出され、水や農業などに関わる祭祀の跡と推定された。出土した遺物はきわめて多く、土器1000点以上、鉄器は鉄・剣・鎌・刀子などが約70点、石製品は勾玉24点、管玉13点、石製模造品15点、白玉約5400点などが見つかった。平成5年度に調査報告書を刊行。

第2次調査 平成9年に実施。調査地は今回の東側に位置する。結婚式場建設事業に先立って実施した緊急発掘調査。調査面積2060㎡。弥生時代、古墳時代、中世の遺構と遺物を検出した。中心となるのは古墳時代で、中期の竪穴住居址5軒を検出し、第1次調査で発見された祭祀遺構の造営主体と推定される集落を確認した。平成10年度に調査報告書を刊行。

第3次調査 平成15年に実施。レストラン建設に先立って実施した緊急発掘調査。調査面積295㎡。古墳時代の遺構と遺物を検出した。遺構は古墳時代中期の土坑1基と土器集中区3か所で、他に時期不明の土坑5基と溝1本がある。高宮遺跡における古墳時代中期の集落の南限にあたと推定される。平成15年度報告書刊行予定。

松本市教育委員会 1994 『松本市文化財調査報告№116 松本市高宮遺跡』

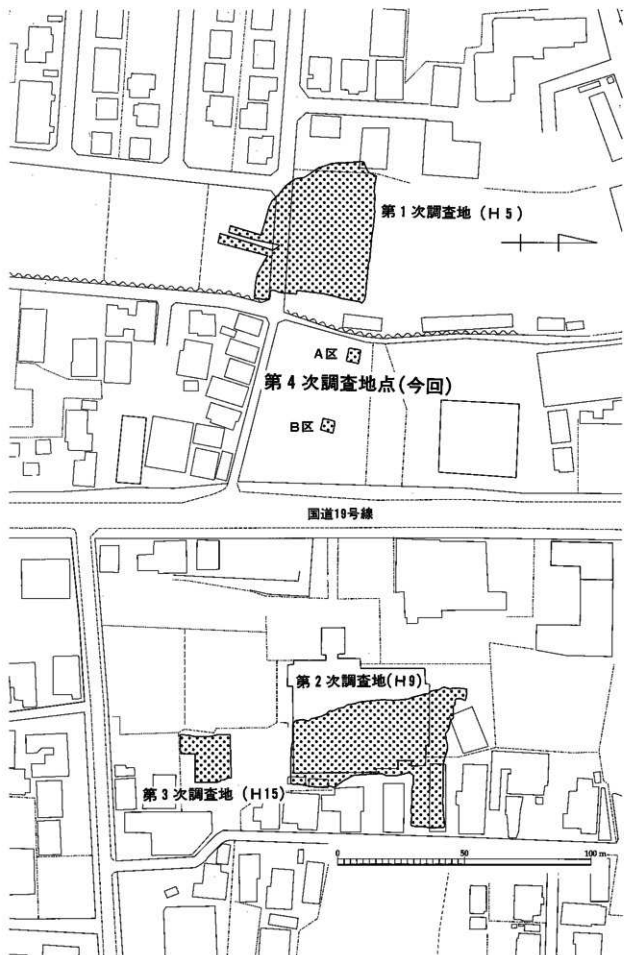
松本市教育委員会 1999 『松本市文化財調査報告№136 長野県松本市高宮遺跡II』

松本市教育委員会 2004 『松本市文化財調査報告№172 長野県松本市高宮遺跡III』

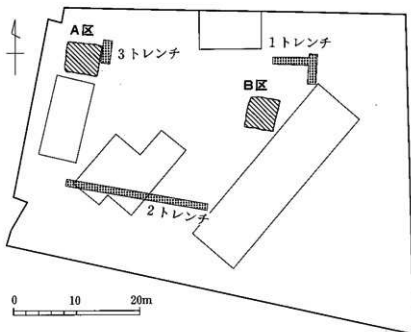
3 周辺遺跡(第1図)

縄文時代 本遺跡の周辺では縄文時代の遺構・遺物の検出はない。

弥生時代 平田北遺跡第6次調査(第1図8)で弥生時代中期前葉～中葉の土器片、出川西遺跡第2次調



第2図 高宮遺跡第1～4次調査範囲図



第3図 開発予定地内の調査地区及び試掘トレンチ配置

査(第1図6)では弥生時代中期中葉の土器片及び中期後半～末の竪穴住居址、当遺跡の第1次調査で弥生時代中期後葉の土器片が確認されており、およそ2000年前、弥生時代の中頃からこの周辺に人々が暮らし始めたと考えられている。つづく弥生時代後期では、出川南遺跡第1・6・11次調査(第1図7)で後期前半の竪穴住居址等が見つかっている。

古墳時代 古墳時代前期は、当遺跡第2次調査で流路内から弥生時代後期後葉の箱清水式の名残を残す壺や、東海系のバレス壺が出土しており、弥生時代末とも古墳時代初頭とも言える時期の集落が付近に存在することが窺われる。出川南遺跡第9次調査では、これよりやや時期は下るものの、東海系を含む古墳時代前期の土器がまとめて出土している。また、出川西遺跡では該期の土器が採集されており、発掘調査で竪穴住居址等の遺構も検出されている。これらの集落は本遺跡から東へおよそ2kmの中山丘陵突端に存在する、東日本最古級の古墳のひとつと考えられる弘法山古墳を築造した集団を考える上で興味深い。

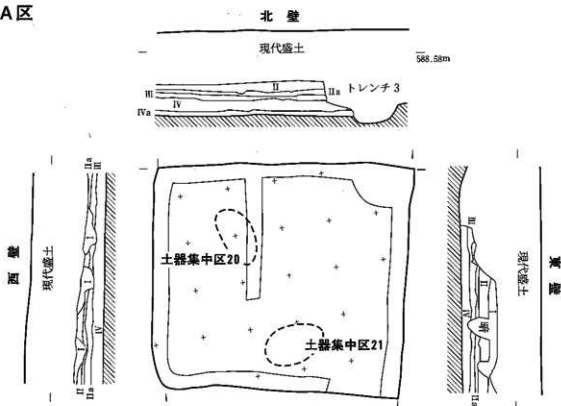
続く古墳時代中期では、本遺跡の第1次調査で前述のように県内でも稀有な水辺の祭祀と推定される遺構が発見されている。出川西遺跡の第6次調査でも同時期の土器が集中して出土する箇所が19か所見つかり、意図的に置き去られた状況が窺えるため、祭祀的な性格を有すると推察された。当遺跡から出川西遺跡の西部にかけての一带が祭祀にかかわる特別な空間として認識されていた可能性が考えられる。また、出川南遺跡第4次調査では、削平されていたが5世紀後葉から6世紀初頭の築造と推定される古墳(平田里古墳)3基の周溝が発見され、1号古墳の周溝からは多量の円筒埴輪・土器器・須恵器が出土している。

古墳時代後期になると出川南遺跡を中心に大規模な集落跡が確認されており、出川南遺跡は第4次調査だけでも竪穴住居址119軒が検出された。

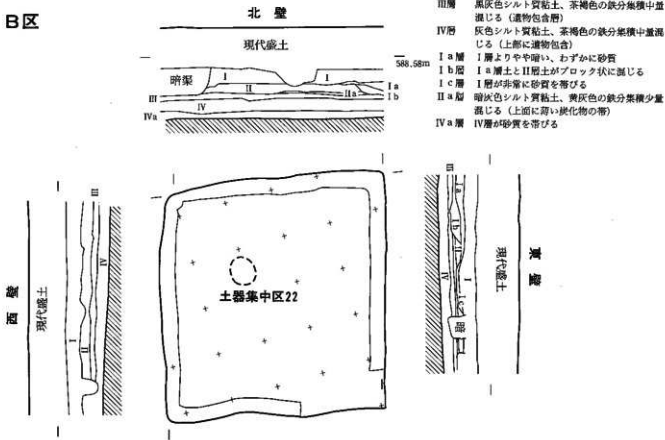
奈良・平安時代 出川南遺跡、平田北遺跡などで集落が確認されているが、古墳時代後期にくらべて規模が縮小している。広域的に見ると、本遺跡の周辺よりさらに南の芳川地区の平田本郷遺跡や小原遺跡、寿地区の向原遺跡や百瀬遺跡、あるいは奈良井川西岸の島立地区の遺跡群に大規模な集落が形成されるようになり、集落立地の中心が拡散、移動した可能性が考えられる。

中世 出川西遺跡、出川南遺跡、出川遺跡(第1図5)などで若干の遺構と遺物が検出されているにすぎない。奈良・平安時代の集落遺跡の立地と同様の傾向があり、本遺跡の周辺以南や奈良井川西岸の遺跡で多数の遺構・遺物が発見されている。

A区



B区



土層序 (A・B区共通)

- I層 暗灰色シルト質粘土 (旧水田耕土)
- II層 暗灰色シルト質粘土わずかに砂質、黄灰色の鉄分集積多量に混じる (旧水田耕土)
- III層 黒灰色シルト質粘土、茶褐色の鉄分集積中量混じる (遺物包含層)
- IV層 灰色シルト質粘土、茶褐色の鉄分集積中量混じる (上部に遺物包含)
- Ia層 I層よりやや暗い、わずかに砂質
- Ib層 Ia層土とII層土がブロック状に混じる
- Ic層 I層が非常に砂質を帯びる
- IIa層 暗灰色シルト質粘土、黄灰色の鉄分集積少量混じる (上部に薄い炭化物の帯)
- IVa層 IV層が砂質を帯びる

第4図 調査区

III 調査

1 調査の概要

今回の調査地点は松本市高宮北3-11にあたり、推定されている高宮遺跡の範囲のほぼ中央部に位置する。調査にあたって、調査地区の設定は開発事業地内の地下埋設物設置地点に限り、約5m方形のものを2ヵ所設定した。西側の調査地区をA区、東側をB区とし、建設重機により遺物包含層直上面までの表土除去を行った後、人力により検出作業と包含層の掘り下げを行い、調査終了後、重機による埋め戻しを行った。調査面積はA区25.043㎡、B区22.343㎡、計47.386㎡である。設定した調査区や遺物出土地点などの測量記録は、開発事業地全体を覆う真北方向に沿った1m方眼を設定して行った。方眼の基準点NS0、EW0の国家座標は(X=23900.000, Y=-48300.000)である。調査区内のグリッド名については1m方眼の最小値に当たる交差点名を用いた。

発掘調査の結果、近・現代のものを除いて明瞭な遺構の検出はなかったが、古墳時代中期と推定される遺物包含層が発達している状況が確認でき、小規模な土器集中区が3ヵ所で認められた。遺物は包含層中から、同時期の土師器の出土があり、他にわずかではあるが人為的に搬入された可能性のある小礫、木杭の一部らしきものも発見された。ただし、木杭は上層より打ち込まれた近現代の物の先端部が残存した可能性が高い。

2 調査結果

(1) 調査区

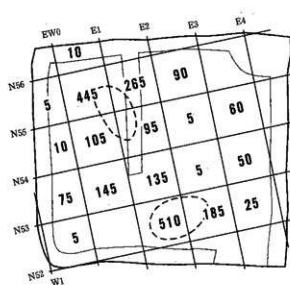
A区(第4図)

現地表(標高588.9~589.1m)から、最終的に約165~175cmを掘り下げた。土層は、現地表から100~110cmは現代の造成埋め土、I層は造成前の旧水田耕作土、II層(IIa層を含む)は旧水田床土、III層は黒灰色粘質で遺物包含層、IV層は灰色粘質で上層部に遺物を包含し、下部のIVa層はIV層より砂質感が増している。I層は北面及び西面で造成時に失われている。また、東面及び西面においてII・III層を切ってI層土が遺構状に落ち込んでいる部分が観察できるが、近・現代の耕作等に伴うものと推定する。II層以下の土層堆積はフラットで、層厚はII層が20~25cm、IIa層が6~10cm、III層が8~16cm、IV層が20~26cmを測る。遺物がIII層を中心にIV層上部まで包含されている点から、IV層がベースとなってその上部に腐植土層のIII層が形成されたものと推定する。

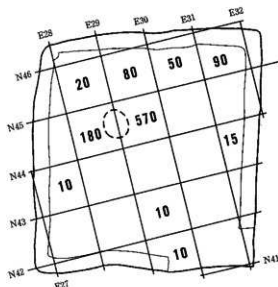
明瞭な遺構はIII層及びIV層では確認できなかったが、本区の北西部N54E0・N54E1・N55E0・N55E1グリッド及び南部N52E1・N52E2グリッドではそれぞれ土器片が集中して出土する傾向が認められた範囲がある。北西部のもの(土器集中区20)はIII層中にあり、南北1.4m、東西0.8mの範囲に土器片20数点、自然礫2点が含まれていた。土器片は大きさ、個体ともにさまざまで、同一個体が割れているような状態ではなかった。南部のもの(土器集中区21)もIII層中に南北0.8m、東西1.2mの範囲で10数点の土器片があり、状態は土器集中区20と同様であった。この他の遺物はIII層及びIV層上部から散発的に出土した。土器集中区20・21及びその他から出土した土器片の若干数が接合し、土器集中区20・21間での接合も1例認められた。

B区(第4図)

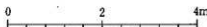
現地表(標高589.2m)から、最終的に約160~190cm掘り下げた。土層は、現地表から80~90cmは現代の造成埋め土、I層(Ia~Ic層を含む)は造成前の旧水田耕作土、II層(IIa層を含む)は旧水田床土、III層は黒灰色粘質で遺物包含層、IV層は灰色粘質で上層部に遺物を包含し、下部のIVa層はA区と同様にIV層より砂



A区



B区



第5図 調査区グリッド配置及び土器出土量(単位:g)

質感が増している。北面、東面及び西面においてII～IV層を切ってI層中から暗渠が掘り込まれているのが観察できる。また、Ia層とIb層、及びIc層はI層下の近世・近代の遺構覆土の可能性がある。II層以下の土層堆積はフラットで、層厚はII層が12～22cm、IIa層が6～10cm、III層が8～16cm、IV層が20～30cmを測る。

明瞭な遺構はIII層及びIV層では確認できなかったが、本区の中央部やや北西寄りN44E28・N44E29グリッドのIII層中に0.5mほどの範囲で土器片が10数点集中して出土している(土器集中区22)。若干、拡散していたが、接合の結果、同一個体の壺の大形破片が割れたものであった(第6図28)。その他の遺物はIII層及びIV層上部からわずかに散発的に出土した。

試掘トレンチ

開発用地内に第1から第3まで3本のトレンチを設定、掘削し、うち第2・第3トレンチの2本で遺物包含層の存在を確認した。第2・第3トレンチの土層序及び層厚は調査区(A区・B区)に相似する。一方、第1トレンチの土層は他のトレンチや調査区とは大きく異なり、造成埋め土の下は青灰色のグライ土層が発達していた。過去に滞水していた可能性を示すもので、遺物包含層は確認できなかった。

遺物はすべて土器で、第2・第3トレンチから出土したが、特に第2トレンチの西部で集中する傾向があった。III層中およびIV層の上部からの出土である。

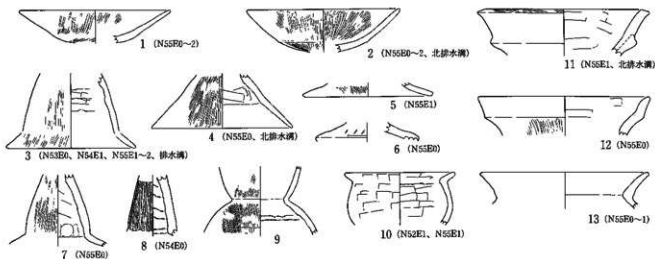
(2) 出土遺物

A区出土遺物(第6図1～27)

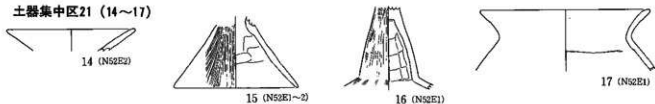
遺物は土器片多数と人為的に持ち込まれた可能性のある小鏢7点、上層から打ち込まれた可能性の高い木杭の先端部1点である。土器はすべて土師器で、器種器形は杯、高杯、壺、埴(直口壺)、甕がある。いずれも古墳時代中期に比定される。小破片が多く全形を知りうるものはない。27点を図示できた。1～13が土器集中区20出土品、14～17が土器集中区21出土品、18～27がその他のA区グリッド出土品である。

1～8、14～16、18～23は高杯で、脚部が2段成型で屈曲を持って外開する高杯A(3・5・7・8・16・20～21)と脚部が単純に外開する高杯B(4・15・23)が認められる。6は高杯Aの外開部がさらに2段になっ

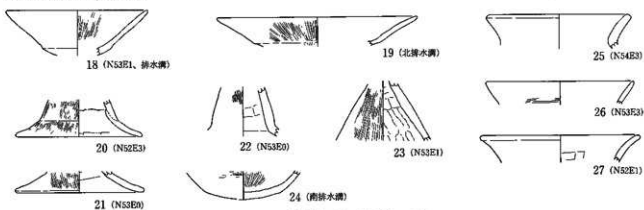
土器集中区20 (1~13)



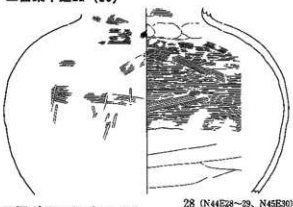
土器集中区21 (14~17)



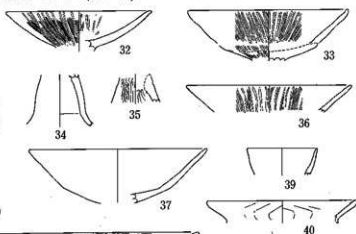
A区グリッド (18~27)



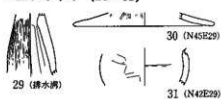
土器集中区22 (28)



試掘トレンチ (32~40)



B区グリッド (29~32)



0 5 10cm

第6図 出土土器実測図

高宮遺跡Ⅳ図化土器観察表

№	地点	器種	寸法		残存度	紋様・調整		実測番号	注記
			口径	底径		外面	内面		
1	A土集20	高杯	16.0		口縁1/12	縦～斜ミガキ	縦～横ミガキ	A015	G010, G015, G026
2	A土集20	高杯	16.2		口縁1/4	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	縦ミガキ	A014	G010, G015, G026, G036, G046
3	A土集20	高杯	13.6		底部1/5	頸部ヨコナデ、縦ミガキ摩滅	輪襷痕のち横ケズリ	A017	G011, G015, G026, G028, G036, G038
4	A土集20	高杯	15.0		底部1/8	頸部ヨコナデ、縦ミガキ	横ケズリ、ナデ	A020	G036, G046
5	A土集20	高杯	13.8		底部1/8	頸部ヨコナデ、縦～斜ミガキ摩滅	ナデ摩滅	A013	G015
6	A土集20	高杯			脚部1/3	ナデ・ケズリ後縦ミガキ		A007	G010
7	A土集20	高杯			脚部1/3	縦ミガキ	工具ナデ、ナデ、指圧痕	A003	G010
8	A土集20	高杯			脚部部完	縦ミガキ	輪襷痕、指おさえ	A002	G009
9	A土集20	壺			頸部1/6	横ケズリ、縦～斜ミガキ摩滅	口縁ヨコナデ、胴部輪襷痕	A022	G010, G012, G014, G015, G024, G046, G048
10	A集1・2	小形壺	11.8		口縁1/4	口縁ヨコナデ、胴部横ケズリ後ナデ	工具ナデ	A021	G015, G016
11	A土集20	壺	18.2		口縁1/6	頸部側取り斜ハケメ、口縁ヨコナデ	横～斜ケズリ後ナデ	A019	G015, G036
12	A土集20	壺	18.2		口縁1/6	口縁ヨコナデ、胴部縦ミガキ	横ケズリ摩滅	A020	G010, G046
13	A土集20	壺	19.8		口縁1/20	口縁ヨコナデ、ナデ	ナデ	A025	G015, G046
14	A土集21	高杯	13.6		口縁1/8	口縁ヨコナデ、摩滅不明	摩滅不明	A006	G023
15	A土集21	高杯	13.1		底部1/3	頸部ヨコナデ、縦ミガキ	ナデ、横ミガキ	A009	G001, G020, G021
16	A土集21	高杯				縦ミガキ	ナデ、工具ナデ	A001	G004
17	A土集21	壺	18.0		口縁一部	口縁ヨコナデ、ナデ	ナデ、輪襷痕	A027	G006, G016
18	A	高杯	15.0		口縁1/8	口縁ヨコナデ、ミガキ摩滅	縦ミガキ	A016	G012, G038
19	A	高杯	21.2		口縁1/10	口縁ヨコナデ、縦ミガキ摩滅	摩滅不明	A005	G036
20	A	高杯	13.4		口縁1/2	頸部ヨコナデ、縦ミガキ	一部ケズリ、ナデ	A012	G030
21	A	高杯	13.6		口縁1/3	頸部ヨコナデ、縦～斜ミガキ	横ケズリ、ナデ	A008	G045
22	A	高杯			脚部1/4	縦ミガキ摩滅	ナデ、横ケズリ	A004	G045
23	A	高杯			脚部1/2	縦ミガキ	横ケズリ、指おさえ	A011	G012, G013
24	A	杯	7.8		底部1/3	一部横ミガキ、ナデ	縦ミガキ、ナデ	A018	G037
25	A	壺	15.4		口縁1/8	口縁ヨコナデ、ナデ	ナデ	A023	G033
26	A	壺	15.8		口縁1/16	口縁ヨコナデ、ナデ、頸部横ハケメ	ナデ	A026	G045
27	A	壺	17.0		口縁1/12	口縁ヨコナデ、ナデ	板状工具ナデ	A024	G012
28	B土集22	壺				粗い横ハケメ後ミガキ摩滅	頸部指おさえ後ハケメ、胴上半横ハケメ、下半工具ナデ	B004	G048, G055, G058, G059
29	B	高杯			脚部部完	縦ミガキ	工具ナデ	B001	G060
30	B	高杯	15.0		底部1/3	頸部ヨコナデ、縦ミガキ摩滅	摩滅	B002	G054, G061
31	B	小形壺			頸部1/10	工具ナデ	ナデ、輪襷痕	B003	G052
32	試T 2	高杯	15.4		口縁完	口縁ヨコナデ、縦ハケメ後縦ミガキ	縦ミガキ	シ001	G071
33	試T 2	高杯	17.0		口縁1/3	口縁ヨコナデ、縦～斜ミガキ	縦ミガキ	シ004 シ008	G066, G068
34	試T 2	高杯			脚部1/3	ナデ	ナデ	シ005	G075
35	試T 2	高杯			脚部1/3	縦ミガキ、接合部工具ナデ	紋り底、工具ナデ	シ006	G072
36	試T 2	高杯	17.6		口縁完	口縁ヨコナデ、縦ミガキ	縦ミガキ	シ007	G071
37	試T 2	高杯	18.8		口縁1/4	摩滅不明	摩滅不明	シ003	G070
38	試T 2	高杯	22.4		口縁1/8	斜ハケメ後斜ミガキ	横ハケメ後斜ハケメ	シ002	G068
39	試T 2	小型丸底	7.5		口縁1/4	摩滅不明	摩滅不明	シ009	G073
40	試T 2	壺	16.0		口縁1/8	口縁ヨコナデ、頸部ナデ、工具ナデ	工具ナデ	シ010	G066

たもの、14は小形で器台に近いものと推定する。9は直口壺または埴、10は小形の甕、11・12は有段口縁または二重口縁の壺の口縁部、13・17は頸部が「く」の字に屈曲する甕である。24は内面にミガキが認められることから杯と判断した。

B区出土遺物（第6図26～31）

遺物は土器と人為的に持ち込まれた可能性のある小礫3点、鳥獣骨片1点である。土器はすべて土師器で、器種器形は高杯、壺、甕がある。いずれも古墳時代中期に比定される。全形を知りうるものはない。小破片が多く、4点を図示できたにすぎない。28の甕が土器集中区22からの出土品、他はB区グリッド出土品である。28は外面のハケメとミガキが非常に積いため甕と判断した。29・30は高杯A、31は小形の甕である。

試掘トレンチ出土遺物（第6図32～40）

遺物は土器のみである。土器はすべて土師器で、器種器形は高杯、小型丸底土器、壺、直口壺(埴)、甕がある。いずれも古墳時代中期に比定される。全形を知りうるものはない。第2トレンチ出土品のみ9点を図示できた。32～38は高杯で、32の杯部のみが一体成形、他の杯部は2段成形によっている。38は口径が22cmを超える大形のものである。39は小形丸底壺の口縁部、40は甕の口縁部である。

IV. 調査のまとめ

まず、高宮遺跡の特徴について触れたい。今回の調査区は狭い範囲に限られ明瞭な遺構の検出はなかったが、良好な状態で残る古墳時代中期の遺物包含層と土器集中区が検出された。明瞭な遺構の検出がなかった点については、第1次調査及び第2次調査では竪穴住居址がそれぞれ3軒と5軒検出されており、その配置は比較的疎であることから、今回の調査地付近にも竪穴住居址等の遺構が存在する可能性は高いが、たまたま遭遇しなかったものと考えている。土器集中区については第1～3次調査でも各所に検出されており、その最たるものは第1次調査で発見された祭祀遺構であろう。いずれも掘り込みはないか、あってもごくわずかなもので、遺構として明瞭ではなく、単に土器が周囲よりもまとまって遺存している点が共通している。水辺の祭祀の他にも住居の周りで行われた祭事等が行われた跡か、あるいは掘り込みを伴わない不規則な廃棄の跡が今回の様な土器集中区の形で検出されたのかもしれない。以上のように、遺構の集中が疎な居住域を含みながら遺物包含層が発達し、土器集中区という形で把握される祭祀を含むなんらかの痕跡が顕著な点が高宮遺跡の大きな特徴と言えよう。

次に、高宮遺跡の主要な時代である古墳時代中期における松本市域の状況のなかで考えたい。この時期の主要な集落遺跡は里山辺地区の堀の内遺跡、中山地区の山影遺跡、ツカヤ下遺跡、岡田地区の松岡遺跡、本郷地区の古屋敷遺跡などがある。また、それらの集落遺跡に対応するように、里山辺の針塚古墳、中山の向畑古墳、岡田の塚山古墳、本郷の桜ヶ丘古墳、妙義山古墳が築造されている。一方、高宮遺跡の周囲で同時期の古墳は、今のところ出川南遺跡のエリア内に平田里古墳が発見されているだけである。この古墳を高宮遺跡の集落が築造したものと想定することは不可能ではないが、他の集落と古墳の関係に比べて若干距離がある。むしろ、平田里古墳の造営集団は出川南遺跡、あるいは出川西遺跡の未発見の同時期集落に求める方が妥当と考える。「周辺遺跡」の項でも触れているが、高宮遺跡から出川西遺跡の西部一帯は祭祀にかかわる特別な空間として認識されていた可能性があるとするれば、その祭祀空間に付随している高宮遺跡も、他の同時期の集落遺跡とは異なった性格を有していた可能性もあろう。その点で対応する古墳が未発見でも問題ないのかもしれない。

最後になりましたが試掘調査及び本調査にあたり埋蔵文化財の保護、保存に御理解をいただき多大な御協力を賜りました鈴商事株式会社、調査地近隣の皆様に感謝申しあげまとめといたします。



開発事業地調査前現況
(北東から)



同上
(北西から)



A区完掘
(西から)



B区完掘
(西から)



A区遺物出土状況



B区遺物出土状況

長野県松本市 高宮遺跡Ⅳ 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし たかみやいせきよん きんきゅうはくつちょうさほうこくしよ							
書名	長野県松本市 高宮遺跡Ⅳ 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№173							
編者名	菊池直哉 直井雅尚 山本紀之 和田和哉							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保存：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263 86-4710)							
発行年月日	2004(平成16)年3月25日 (平成15年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高宮	松本市高宮北 3-11 他	20202	174	36度 12分 52秒	137度 57分 46秒	20031003~ 20031017	47.4㎡	店舗建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高宮	集落跡 祭祀跡	縄紋	なし		なし		古墳時代中期と推定される遺物包含層が発達。遺物は包含層中から、同時期の土師器がまとまって出土。	
		弥生	なし		なし			
		古墳	土器集中区3 (20~22)		土師器(中期) 高杯・壺・甕 ：整理用コンテナー1箱			
		奈良・平安	なし		なし			
		中世	なし		なし			

松本市文化財調査報告 №173

長野県松本市 高宮遺跡Ⅳ 緊急発掘調査報告書

発行日 平成16年3月25日

発行者 松本市教育委員会 〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社 〒390-0865 長野県松本市新橋7番21号